

# Prajñāpāramitāratnaguṇasaṃcayagāthā における語幹 *-yaya-* の動詞について

京都光華女子大学真宗文化研究所特別研究員

稲葉 維摩

## 1. はじめに

Prajñāpāramitāratnaguṇasaṃcayagāthā（以下、Rgs）は韻文で書かれた仏教経典である。かなり古い段階の仏教サンスクリット語<sup>1</sup>で書かれたものとして重視されている（Edgerton 1961；Yuyama 1973 b, 1976；湯山 1973 など）。Yuyama（1976）は Rgs に2つの系統があることを示して、より本来的と考えられる系統のテキストを校訂した。Yuyama（1973 b）は、そのテキストに現れる仏教サンスクリット語の文法的な解釈を示した文法書である。この文法書は Rgs を読む上で基本となる理解を提供してくれる。しかし、訂正すべき点や問題も少なくないことがわかってきた。

本論文は、Yuyama（1973 b：166–167）が“non-causative suffix *-aya-*, extended from *-ya-* conjugation”と理解する動詞に対して、より妥当な説明を試みる。問題の動詞は *-yaya-* という語幹を持っているのだが、これは仏教サンスクリット語の文法的な形式ではなく、韻文で許容されるバリエーションだと考えられることを示す。その際、本論文は、Yuyama（1973 b）のように仏教サンスクリット語と見なされる語形だけに焦点をしばるのではなく、テキスト全体でどう使われているかという広い視点に立つ。このことを通して、仏教サンスクリット語に対する従来の見方の問題を指摘する。

## 2. 仏教サンスクリット語の概要

仏教サンスクリット語は仏教文献を伝える言語である。仏教は初め、サンスクリット語<sup>2</sup>からある程度言語変化の進んだ中期インド・アーリヤ諸語で仏典を伝えていた。サンスクリット語は、中期インド・アーリヤ諸語と比べて、言語の歴史的な古い姿を留めた言語で、仏教が現れる以前から続いてきたヴェーダや叙事詩など、インドの様々な文献を伝えている。仏教は次第に、この伝統的・権威的なサンスクリット語を使うようになる。仏教サンスクリット語とは、サンスクリット語の特徴と中期インド・アーリヤ諸語の特徴が音韻や形態の面で両立しているように見える、仏教文献特有の言語を言う。

仏教サンスクリット語の文法書や研究では、その特殊な語形が問題にされ、語源や変化の過程などが注目されてきた。Edgerton (1953) は仏教サンスクリット語の文法書と辞書である。そこに描かれる文法にはきわめて多くのバリエーションがあり、文献や時代、写本によってその姿が異なる。

## 3. 本論文が扱うテキストの概要

Rgs は般若波羅蜜を説く韻文の經典である。全体で 32 章あり、1–28 章は、同じく般若波羅蜜を説く散文の經典 *Aṣṭasāhasrikāprajñāpāramitā* に相当する内容を伝えている。Yuyama (1976) は Rgs のサンスクリット語テキストに 2 つの系統があることを示し、より本来的な読みと考えられる方のテキストを校訂した。従来の系統が B、Yuyama (1976) の扱った方が A とされている。本論文が扱うのは Yuyama (1976) の校訂 (以下、Rgs (A)) である。他には漢語、チベット語、モンゴル語、西夏語のテキストがある (Yuyama 1976: xxiii–xlvi)。Yuyama (1973 b) は Rgs (A) の文法書である。

#### 4. Yuyama (1973 b) や Edgerton (1953) の問題点

Yuyama (1973 b: 2-3) は自身の文法書を Edgerton (1953) の補足と考えている。そのためか、この文法書からは Rgs (A) の限られた面しか知ることができない。というのも、文法書の方針が「サンスクリット語でない音韻と形態を記すこと」だからである<sup>3</sup>。つまり Yuyama (1973 b) では、テキストの中期インド・アーリヤ諸語的な要素だけが扱われていて、サンスクリット語的と見なされるものは省かれているのである。この姿勢は Edgerton (1953) に由来するものと言える。

しかし、サンスクリット語的か中期インド・アーリヤ諸語的かを線引きして区別するのはかなり難しい。はっきりした基準が立てられないからである。特に Rgs ではどちらも連続体であって、別々の言語が使われているというわけではない。

Edgerton (1953) は様々なテキストから仏教サンスクリット語と見なしうる語形を集め、文法的な分類や解釈を行ったのだが、その基準になっているのはサンスクリット語の文法である。ところが、Edgerton (1953) が扱う語の中には、サンスクリット語の文法にそもそも合わないと考えられるものや、文法的な形式でないものが多数含まれている（写本の特性や読み<sup>4</sup>、韻文における韻律の制約や修辭的な点で許容されるバリエーションなど）。

一方、稲葉 (2018, 2019) は、Edgerton (1953) や Yuyama (1973 b) で a-語幹名詞の語形変化と見なされていた語末 -a が、実は文法的な形式ではなく、韻文で許容されるバリエーションだと言えることを示した<sup>5</sup>。これは、仏教サンスクリット語と見なされている形だけに焦点をしぼるのではなく、テキスト全体を通して、現れる環境などを広く観察した結果である。したがって、仏教サンスクリット語を扱う上で今後必要なのは、既存の文法にとらわれず、個々のテキストの言語事実に基づいた考察をしていくことだと言える<sup>6</sup>。

## 5. テキストから見えてくる動詞の活用

それでは問題を検討していこう。本論文では、*ṛdh-*「達成する」、*namasyati*「敬う」、*pad-*「行く」、*paś-*「見る」、*yuj-*「繋ぐ」の5つの動詞を検討する。まず考察の下地として、この5つの動詞のサンスクリット語における活用をまとめておく。ここでは、本論文に関わる活用として、接辞 *-ya-* の付いた形式と接辞 *-aya-* の付いた形式だけをあげることにする。動詞によって異なるが、接辞 *-ya-* からは逆使役 (anticausative)、受け身、他動詞が派生される。本論文では、Kulikov (2012) にならって *-ya-* の付いた形式を *-ya-* 現在と呼ぶことにする。また、接辞 *-ya-* は名詞派生動詞も作るが、それは *-ya-* 現在と呼ばずに区別している。接辞 *-aya-* からは他動詞と使役動詞が派生される。こちらは使役と呼ぶ。以下には、ハイフンで動詞語幹と人称語尾を分けている<sup>7</sup>。

<i>ṛdh-</i>	<i>-ya-</i> 現在 <i>ṛdhya-te</i> 「うまくいく」 使役 <i>ardhaya-ti</i> 「うまくいくようにする」
<i>namas-</i>	名詞派生動詞 <i>namasya-ti</i> 「敬う」
<i>pad-</i>	<i>-ya-</i> 現在 <i>padya-te/(ti)</i> 「行く、倒れる」 使役 <i>pādaya-ti/te</i> 「倒す」
<i>paś-</i>	<i>-ya-</i> 現在 <i>paśya-ti</i> 「見る」 使役 <i>darśaya-ti/te</i> 「見せる、現す」
<i>yuj-</i>	<i>-ya-</i> 現在 <i>yujya-te</i> 「繋がる、使われる」 使役 <i>yojaya-ti/te</i> 「繋ぐ、使う」

さて、Rgs (A) にはこれらの動詞の語幹が *-yaya-* となっているものが現れる。Yuyama (1973 b : 166–167) はそれを「接辞 *-ya-* の活用から拡張された、使役の意味でない接辞 *-aya-*」(“non-causative suffix *-aya-*, extended from *-ya-* conjugation”) と解釈している。つまり、上にあげた *-ya-* 現在あるいは名詞派

生動詞に接辞 -aya- が加えられているのだが、-aya- から派生される意味は持つておらず、形式の点だけで拡張されたと見ている。以下に問題の形をあげる。比較のため、先にあげたサンスクリット語の基本形を括弧に入れた。数字は Rgs (A) の章と詩節番号である。

- 21.1 sam-ṛdhyaya-nti (直説法 3 人称複数) 「うまくいく」 (ṛdhyā-te)
- 27.1 namasyaya-nti (直説法 3 人称複数) 「敬う」 (namasya-ti)
- 31.11 upa-padyayā-tī (直説法 3 人称単数) 「生じる」 (padya-te/(ti))
- 10.3 paśyayeya<sup>8</sup> (希求法 3 人称単数) 「見る」 (paśya-ti)
- 20.14 paśyaya-tī (直説法 3 人称単数)
- 12.1 pra-yujyayeyuh<sup>9</sup> (希求法 3 人称複数) 「とりくむ、専念する」 (yujya-te)

意味はいずれも Yuyama (1973 b : 165–167) の言うように使役の意味でなく、自動詞と他動詞がある。この他動詞は、Yuyama (1973 b) の想定する接辞 -aya- によって派生されたのではなく、括弧に入れた基本形と変わらない意味である。問題の語形と基本形を比べると、語幹が -yaya- になっていることがわかる。Yuyama (1973 b) はこれを接辞 -aya- が拡張されたと見ている。

一方、テキストからこれらの動詞の活用を広く集めてみると、新たな事実が見えてくる。まず、動詞 pad- を見てみよう。Rgs (A) において、pad- は -ya- 現在が padya-te/ti、使役が pādāya-ti という活用である。これは先にあげたサンスクリット語の基本形と同じであり、問題の upapadyayātī だけが不規則であることがわかる。以下には Rgs (A) から得られるパラダイムと問題の形が現れる韻文をあげる。Rgs (A) の韻律は *vasantatilakā* である。14 音節 4 行詩で、音節の長短の配列が決まっている<sup>10</sup>。Rgs (A) では、行頭の長音節が短音節 2 つに変わることも多い (Edgerton 1961, Yuyama 1973 a)。例文の “|” は 1, 3 行目、“/” は 2 行目、“//” は 4 行目の区切りである。

前接辞	-ya- 現在	使役	問題の形
ud-	utpadyate 25.3	upādayātī 1.25, 30.1	
	upadyate 22.6	upādayanti 19.8	
	upadyati 24.6, 26.7, 30.5	upādayiṣyanti (future) 11.7	
		upādayitvā (gerund) 22.8	
		upāditavya- (gerundive) 30.11, 30.13	
upa-	upapadyati 20.4, 20.24, 21.1		upapadyayātī 31.11
	upapadyiṣyanti (future) 11.2		
	upapadya (gerund) 29.3		
prati-	pratipadyi (optative) 20.3		

(1) Rgs (A) 31.11 ahasamjña vastumamatā bhavate ca rāgo | kutu tyāgabud-  
dhi bhaviṣyāti hi momuhānām /

mātsarya preta bhavate **upapadyayātī** | athavā manuṣyi tada bhoti daridrabhūto //  
「自我意識、物事の所有意識、そして貪欲が生じる。どうして迷いに迷っ  
た者たちに捨離の知が生じるだろうか。

ねたみが生じ、餓鬼として／餓鬼に生まれる。あるいは人間に〔生まれ〕、  
その時には貧しい状態になる」

次に動詞 *paś-* である。これも Rgs (A) では *-ya-* 現在 *paśya-ti/te*<sup>11</sup>、使役 *darśaya-ti/te* という、基本形に則った活用になっていて、問題の2語だけが不規則である。

前接辞	-ya- 現在	使役	問題の形
	paśyati 9.2, 10.5, 10.9, 13.1, 20.22, 30.5	darśayate 12.8, 20.6, 20.12	paśyayatī 20.14
	paśyate 10.5	darśayanti 8.2	paśyayeya 10.3
	paśyanti 26.5	darśeti 26.6, 26.7	
	paśyatva (gerund) 19.8		
	paśyitva (gerund) 29.4		
upa-		upadarśayi (optative) 22.11	
ni-		nidarśayāti 12.8	
		nidarśayātī 20.11	
		nidarśayanti 8.2	
		nidarśayi (optative) 4.5	

(2) Rgs (A) 20.14 em eva sthitva karuṇām vidu bodhisattvo | prajñā-  
upāyaduvichatraparigghīto /  
śūnyānimittapraṇidhīm vimṣṣāti dharmān | na ca nirvṛtiṃ sprṣati **paśyayati** ca  
dharmān //

「まったく同様に、哀れみを知っている菩薩は立って、般若と方便という  
2本の傘を持ち、空、無相、無願のダルマを考察する。涅槃を達成せず  
に、ダルマを見る」

(3) Rgs (A) 10.3 kāntāramārga puruṣo bahuyojanehi | gopālusīmuvana-  
sāmpadu **paśyayeya** /

āśvāsaprāptu bhavati na ca cauratrāso | abhyāsa grāmanagarāṇa ime nimittāḥ //  
「深い森の道で人が何ヨージュアナを経て、牛飼いや境界や森の完備を見ると  
すれば、彼は回復し、盗賊に対する恐れは生じない。集落や街の近くで  
は、これらの特徴がある」

動詞 yuj- は Rgs (A) で -ya- 現在しか現れないのだが、やはり不規則なのは

問題の1例だけである。yuj- の -ya- 現在は、サンスクリット語では語尾が中動態なのだが、Rgs (A) では語尾が能動で意味は受け身と逆使役の両方がある。この点以外はサンスクリット語と同じである。

前接辞	-ya- 現在	問題の形
	yujyati 10.1(4回)	
	yujyat(u) (imperative) 16.3	
abhi-	abhiyujyati 27.4	
pra-	prayujyati 10.2	prayujyayeyush 12.1

(4) Rgs (A) 12.1 mātāya putra bahu santi gilānikāya | te sarvi durmanasa ta-  
tra **prayujyayeyuḥ** /

em eva buddha pi daśaddiśi lokadhātau | imu prajñapāramita mātu samanv-  
āharanti //

「病気の母に息子がたくさんいる。彼ら（息子たち）はみな憂いをもって  
彼女に専念するだろう。

まったく同様に、ブッダたちも十方世界で、この母なる般若波羅蜜に集中  
する」

namasyati に関しては、問題の形の他に定動詞が得られない。だが、非定型  
動詞は基本形に合う形である。

非定型動詞	問題の形
namasyanīya- (gerundive) 4.3	namasyayanti 27.1

(5) Rgs (A) 27.1 evaṃ caranta vidunā pṛthudevasaṃghāḥ | kṛta-añjalīpūṭa  
praṇamya **namasyayanti** /

buddhā pi yāvata daśaddiśi lokadhātau | guṇavarṇamālaparikīrtana kurvayanti //

「十方世界でブッダたちも徳のことばを述べる、このように行動している  
知識ある者たちを、個々の神々の集まりは合掌のくぼみを形作ってお辞儀



し、敬う」

動詞 ṛdh- は問題の形しか現れないため、残念ながらパラダイムが得られない。

前接辞	問題の形
sam-	samṛdhyanti 21.1

(6) Rgs (A) 21.1 athavāsya manyan’ upapadyati vyākṛto ’smi | satyādhiṣṭhāna  
vividhāni **samṛdhyanti** /

yadi anya vyākṛta kumanyati bodhisattvo | jñātavya manyanasthito ayu alpabud-  
dhiḥ //

「あるいはこの者に慢心が生まれる。『私は授記されている。種々の真実の決定はうまくいく』。

もし他の者が授記されているのを菩薩が悪く考えるなら、この者は慢心に留まっていて少ない知識しか持ち合わせていないと知られるべきである」

以上に見たことをまとめよう。パラダイムが得られる pad-, paś-, yuj- は基本的にサンスクリット語と同じ活用をしている。一方、問題の語幹 -yaya- は、パラダイムの得られない ṛdh- と namasyati も含めて、1, 2 回しか現れないまれな形である。また、それらはいずれも特別な意味を持っておらず、基本形と変わらない意味を表している。さらに、例文 (2) の paśyayati 以外、問題の形はどれも行末に現れる。以上を踏まえると、そもそも Yuyama (1973 b) の言う接辞 -aya- は本当に付いているのかということが問題になる。次にこのことを考えていこう。

## 6. 韻文の許容として

Yuyama (1973 b : 167) は動詞 paś- の参考に Edgerton (1953 : §38.21) を指

示する。Edgerton (1953 : §38.21) は語幹 *-aya-* を持つ様々な語形を集めている。Yuyama (1973 b : 167) が示しているのは同じ動詞 *paś-* の現在分詞 *vipaśyayamāna-* 「観察する」だろう。これは確かに Rgs (A) の *paśyayati*, *paśyayeya* と同じ語幹を持っている。

Edgerton (1953 : §38.21) があげる *vipaśyayamāna-* の例文を見てみよう。そこには同じく現在分詞の *viśodhayamāna-* 「清める」、*vimocayamāna-* 「解放する」、*vigāhayamāna-* 「潜る」が一緒に使われているのだが、Edgerton (1953) は *vipaśyayamāna-* と *vigāhayamāna-* について、韻律やリズムの点で他の現在分詞と合わせた形だと述べている。

(7) Gv 433 v. 39<sup>12</sup> *kṣetrasamudra viśodhayamānaḥ | sattvasamudra vimoc-*  
*ayamānaḥ / dharmasamudra vipaśyayamāno | jñānasamudra vigāhayamānaḥ //*  
「国土という海を清めながら、衆生という海を解放しながら、  
ダルマという海を観察しながら、知恵という海に潜りながら」

つまり、通常は *vipaśyamāna-* という形なのだが、韻文の音節数や他の現在分詞と形を合わせるために *vipaśyayamāna-* になったと考えられている。それぞれの現在分詞に先立つ名詞も、複合語の後部の *samudra-* 「海」が共通している。そのため、修辭的な統一がされているという見方は的を得ていると言える。Edgerton (1953 : §38.21) は他にも語幹部分が *-yaya-* の形式をあげているのだが、どれも韻文に現れるものである<sup>13</sup>。

Edgerton (1953) の第 38 章は動詞語幹 *-aya-* を扱う章なのだが、接辞 *-aya-* に限られていないことに注意しなければならない。Edgerton (1953) は、語幹 *-aya-* が使役だけでなく、本来 *-aya-* を持たない現在時制や受動形式にさえ現れることを述べている（受動に関しては §37.21 も参照）。言い換えると、Edgerton (1953) の第 38 章には接辞だけでなく、韻律や修辭といった、それぞれ要因の異なるものが *-aya-* という形のもとに集められているということになる。その中には (7) のように、修辭的な点から結果的に語幹が *-aya-* になっただけの

場合もある。したがって、仏教サンスクリット語では、語幹が -aya- に見えたり、Edgerton (1953) が語幹 -aya- として扱っているとしても、接辞の -aya- が付いているとは限らないのである。そうすると、意味も接辞 -aya- から派生される使役とは限らなくなる。

さて、以上に見た通り、Rgs (A) に現れる問題の形 -yaya- は、テキストで使われている基本的な活用形の中で 1, 2 回しか現れないまれなものであり、意味も変わらない。したがって、これは文法的な形ではなく、韻律で決まっている音節数を満たすための韻文で許容される変形だと考えられる。

## 7. まとめ

本論文は、Rgs (A) に現れる語幹 -yaya- の動詞を考察した。Rgs (A) の文法書である Yuyama (1973 b) はこれを “non-causative suffix *-aya-*, extended from *-ya-conjugation*” と考える。しかし、テキストから得られる基本的な活用形を考慮に入れると、問題の動詞語幹は 1, 2 回しか現れないまれな形であることがわかる。意味も基本の活用と変わらない。テキストが韻文であることを踏まえれば、問題の形は文法的な派生ではなく、韻律の条件に従うためのバリエーションだと考えられる。

本論文で見たように、テキストには文法的な形式だけでなく、文法に反するような変形も多数あって、連続体をなしている。Edgerton (1953) や Yuyama (1973 b) は扱う範囲を仏教サンスクリット語と見なしうのものだけに限定した。また、韻文ならではの変形や修辭的な問題も文法形式として扱う場合がある。だが、本論文に見た限りでは、テキストに広く使われている形をサンスクリット語、1, 2 回しか現れないような形を仏教サンスクリット語として区別してしまうのは無理があると言える。今後は、こうした従来の見方が持つ問題を解決していかなければならない。

・略号と参考文献

v. = verse

Dbhs = Kondō, Ryūkō. 1936. *Daśabhūmīśvaro nāma Mahāyānasūtram*. Tokyo : Daijyō Bukkyō Kenyō-Kai.

Gv = Vaidya, P. L. 1960. *Gaṇḍavyūhasūtra*. Darbhanga : The Mithila Institute.

Lv = Lefmann, S. 1902–1908. *Lalita vistara : Leben und Lehre des Čākya-Buddha*. 2 vols. Halle a. S. : Verlag der Buchhandlung des Weisenhauses.

PW = Böhtlingk, Otto and Rudolph Roth. 1855–1875. *Sanskrit-Wörterbuch*. 7 vols.. St. Petersburg.

Rgs = Prajñāpāramitāratnaguṇasamcayagāthā

Rgs (A) = Yuyama, Akira. 1976. *Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā (Sanskrit Recension A)*. Cambridge : Cambridge University Press.

Brough, John. 1954. The Language of the Buddhist Sanskrit Texts. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 16(2) : 351–375.

Edgerton, Franklin. 1953. *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 vols. New Haven : Yale University Press.

———. 1961. The Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā. *Indo-Iranian Journal* 5(1) : 1–18.

外薮幸一 1994 『ラリタヴィスタラの研究』上巻 東京：大東出版社。

———. 2019 『ラリタヴィスタラの研究』中巻 東京：大東出版社。

稲葉維摩 2018 「仏教サンスクリット語における a- 語幹名詞の語末 -a について— Larger Sukhāvativyūha と Saddharmapuṇḍarikasūtra に基いて—」『大谷學報』98(1) : 45–62.

———. 2019 「Prajñāpāramitāratnaguṇasamcayagāthā (Sanskrit Recension A) における a- 語幹名詞の語末 -a」『真宗文化：真宗文化研究所年報』28 : 1–16.

Kulikov, Leonid. 2012. *The Vedic -ya-presents : Passives and intransitivity in Old Indo-Aryan*. Amsterdam ; New York : Rodopi.

Oguibénine, Boris. 2016. *A Descriptive Grammar of Buddhist Sanskrit : The language of the textual tradition of the Mahāsāṃghika-Lokottaravādins*. Washington, DC : Institute for the Study of Man.

Rahder, Johannes, and Shinryu Susa. 1932. The Gāthās of the Daśabhūmika-sūtra. *The Eastern Buddhist* 6(1) : 51–84.

Yuyama, Akira. 1973 a. Remarks on the Metre of the Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā. In Perala Ratnam (ed.), *Studies in Indo-Asian Art and Culture*, vol. 2 : 243–253. New Delhi : International Academy of Indian Culture.

———. 1973 b. *A Grammar of the Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā (Sanskrit Recension A)*. Canberra : Faculty of Asian Studies in association with Australian National

University Press.

湯山 明 1973 「宝徳蔵般若に関する若干の問題」中村元博士還暦記念会（編）『インド思想と仏教：中村元博士還暦記念論集』271-282 東京：春秋社。

## 註

- 1 Edgerton (1953) はこの言語を “Buddhist Hybrid Sanskrit” 「仏教混交サンスクリット語」と呼ぶ。稲葉 (2018, 2019) ではこの名称を使ったが、「混交」ということばに疑問を感じるので、本論文では仏教文献に特徴的なサンスクリット語という意味で、仏教サンスクリット語と呼ぶことにする。
- 2 本論文では「サンスクリット語」をヴェーダ語と古典サンスクリット語の総称として用いる。
- 3 Yuyama (1973 b:2) は自身の文法書を次のように位置づけている。“The present work is intended to give a brief description of every phenomenon of non-Sanskritic phonology and morphology found in the language of the Sanskrit Recension A of the Rgs. ... This grammar is more or less designed to supplement F. Edgerton’s monumental work *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar* (1953).”
- 4 Brough (1954) は主に写本の点から、仏教サンスクリット語を設定する際の難しさや危うさを指摘する。
- 5 稲葉 (2018, 2019) では参照していなかったが、Brough (1954) も韻文に現れる a- 語幹名詞の語末 -a は文法形式でないと考えている。サンスクリット語の名詞は性・数・格を区別して語形変化する。仏教サンスクリット語の韻文には、しばしば語末 -a が現れる。Brough (1954:352) は、これが複数と動詞の目的語に多いとし、語形変化していない語幹のままの形であると言う。複数や動詞の目的語といった性質は文脈から生まれると考えている。一方、稲葉 (2018, 2019) は、語末 -a の現れる環境がほぼ決まっていることを明らかにした。すなわち、語末 -a は統語上の主要な格（主格・対格）に圧倒的に多く、修飾関係にある同格の語・他動詞の目的語・副詞的な語として現れる。これは明確な格表示を持たない語末 -a を文において正しく解釈できるようにするためだと考えられる。
- 6 このことは仏教サンスクリット語の新しい文法書である Oguibénine (2016) も指摘している。
- 7 サンスクリット語は能動態と中動態を語尾で区別する。能動態 3 人称単数の語尾が -ti、中動態 3 人称単数が -te である。動詞によってどちらか片方だけを持つ場合、両方を持つ場合が異なり、また接頭辞によっても変わる。ここでは、接辞 -ya- の動詞については Kulikov (2012) を、他は PW を主に参照した。
- 8 語幹と語尾が融合しているため、ハイフンを入れていない。
- 9 語幹と語尾が融合しているため、ハイフンを入れていない。
- 10 先にあげた upapadyayātī や paśyayātī、あるいは表にあげる upādayātī など、語末の部分で本来短いはずの母音が長くなっていることがしばしばある。これは韻律で決められた音節の長さに合わせての結果である。また、動詞 pad- に前接辞 ud- が付いた語の

語頭には、utpadyate, upadyate というバリエーションがある。前者が本来の形である。比べてみると、後者の方が語頭の音節が短い。これも韻律に合わせた形と言える。本論文ではこうしたバリエーションは取り上げず、語幹 -yaya- に焦点を当てる。

- 11 Rgs (A) には中動態の語尾が1回現れる。次にあげる韻文の2行めに中動態の *paśyate* が使われている。しかし、続く3行めには能動態 *paśyati* も使われていて、両者に意味の違いは見出し難い。Rgs (A) 10.5 *puruṣo hi sāgarajalaṃ vraji paśyanāya | saci paśyate drumavanaspatiśailarājam / athavā na paśyati nimitta nikāṅkṣa bhoṭī | abhyāsito mahasamudra na so 'tidūre //* 「人が海の水を見に行くとしよう。もし木々の主や山の王を見るなら〔海はまだ遠いと知る〕。あるいはまた〔そういった海が遠い〕兆候を見ないなら、疑いはなくなる。大海は近い、遠くはない〔と知る〕」
- 12 Edgerton (1953: §38.21) は *Bhadracarī* という文献を参照しているが、これは *Gaṇḍavyūha* の最後の章と一致する。ここでは *Gaṇḍavyūha* の方を引用する。
- 13 Edgerton (1953: §38.21) があげるのは *Lalitavistara* (以下、Lv) の例である。Lv を新しく校訂した外蘭 (1994, 2019) とは詩節番号や読みが異なるため、その該当箇所も一緒にあげておく。Lv p. 49.11 *abhimanyayāma* (外蘭 1994: 368 v. 51 *atimanyayāma*), p. 91.6 *ghuṣyayante* (458 v. 24), p. 115.9 *saṃvidyayanta* (502 v. 83), p. 119.2 *namasyayanti* (510 v. 1).

また、Edgerton (1953) は取り上げていないが、他に *Daśabhūmikasūtra* (以下、Dbhs) に語幹 -yaya- の動詞が見つかった。いずれも韻文に現れる。韻文部分だけを校訂した *Rahder & Susa* (1932) の該当箇所も一緒に示す。Dbhs p. 110 v. 15 *upapadyayanti* (*Rahder & Susa* 1932: 55 v. 25), p. 168 v. 3 *anubudhyayanti* (70 v. 16).

以上は本論文で扱った語と同じように、意味が変わらないものである。一方、Dbhs p. 176 v. 7 の使役動詞 *darśayanti* が Edgerton (1953: §38.9) の参照した校訂本や *Rahder & Susa* (1932: 74 v. 7) では *paśyayanti* と読まれていて、使役動詞と見なされている。また、Edgerton (1953: §38.11) は Lv p. 242.7 *dahyayante* (外蘭 2019: 170 v. 22) も使役だと述べる。本論文の扱った Rgs (A) では特に問題になっていないが、他の文献にはテキストの校訂や章ごとの成立年代の違いといった問題がある。そのため、他の文献に見つかる語については今後を検討していきたい。